

# 第1章 坂井市の概要

---





# 1. 自然環境

## (1) 位置・面積

坂井市は、福井県の北部に位置し、南北約 17 km、東西約 32 kmにおよんでおり、東西に細長く、面積は約 209.67 km<sup>2</sup>である。西は日本海に面し、東は勝山市、北はあわら市、および石川県、南は福井市、永平寺町に接している。

## (2) 地形・地質と景観

本市の東部には、加越山地の一部を構成する丈競山（標高 1,045m）や浄法寺山（標高 1,052.9 m）などの山々が連なっており、山頂からはほぼ市内全域の四季折々の表情ゆたかな姿を望むことができる。また、本市東部の森林地域が竹田川の源流となっている。

南部には、九頭竜川が上流両岸を山岳地に挟まれるように流れ、河川敷や中洲の緑地と一体となった景観をつくり出している。

西部には加越台地の西端にあたる丘陵地と砂丘地が広がっている。平野部から海岸部は扇状地状となり、九頭竜川河口には三国湊の市街地が形成され、北前船の寄港地として栄えた。砂丘には特産物であるスイカやらっきょうなどの畑が見られる。

中央部には、福井県随一の穀倉地帯である広大な坂井平野が広がっている。この坂井平野は九頭竜川によって運ばれた砂礫や泥が堆積して形成された肥沃な沖積平野であり、古代から稲作を基礎として発展してきた歴史的背景により、水田地帯の中に形成された集落景観が生まれた。木部、大石地区では、水田を維持するために輪中集落が成立した。現在も地区にはその名残を示す堤防が一部残されている。

また、坂井平野には河川蛇行による自然堤防や後背湿地が分布しており、平野にはかつて沼地や葦原が多くあったと推定される。

さらに海岸部沿いには、世界有数の巨大な柱状の岩（柱状節理）が続く東尋坊、雄島と越前松島がある。これらは国の名勝・天然記念物に指定されており、約 12km にわたる海岸区域が範囲となる。また、類まれな景観に富むことから、越前加賀海岸国定公園の特別保護地区に指定されている。この地域一帯では、巨大な柱状節理の海食崖が見られ、約 1,300 万年前の火山活動と思われる火山岩、火山砕屑岩、火山性堆積岩などが露出する。指定区域は多様な岩質から成り立ち、東尋坊ではデイサイト、雄島では流紋岩、越前松島では玄武岩質安山岩が見られる。また、火山活動で変動した地層では、断層やしわのように湾曲した褶曲などの様子が見られる。そこに長年にわたる風化と浸食が繰り返され、現在の地形が形成されている。風光明媚な観光地としても知られ、多くの文学者や芸術家を魅了した景観となっている。



図5 坂井市の位置図

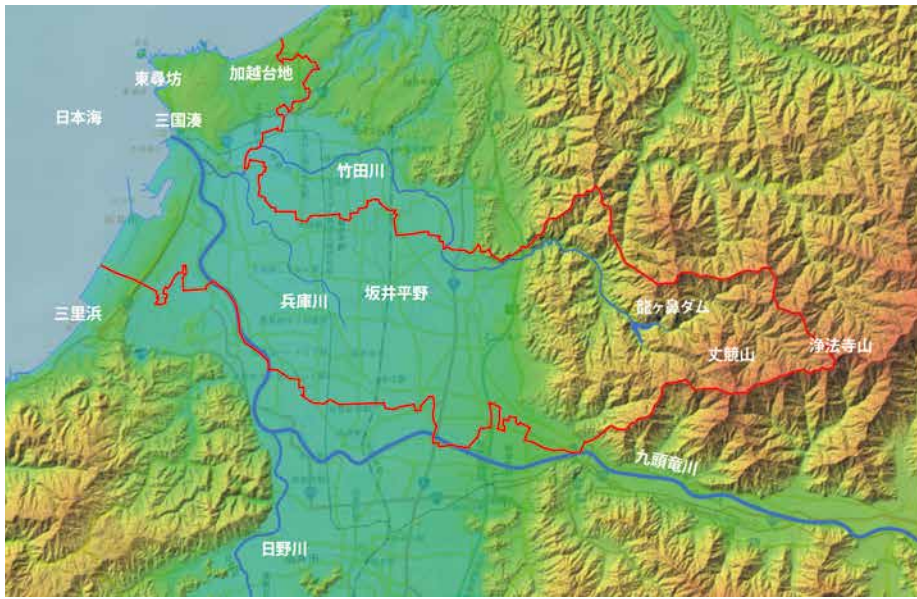


図6 坂井市の地形・河川図



写真4 越前松島の柱状節理



写真5 東尋坊の柱状節理



写真6 市内中央部の水田と集落

### (3) 気候

本市は、冬季に曇りや雪が多い日本海式気候に属す。山間地域においては降雪量が多く、海岸域の積雪量は極めて少ない。三国海岸一帯では、冬になると北西の季節風によって大波が激しく打ち寄せ、東尋坊などの荒々しい海食崖や海食地形の形成の原因となっている。

平成 27 (2015) 年から令和元 (2019) 年までの 5 年間における年間降水量の平均値は 2,040mm、平均気温は 14.8℃となっている。月別の推移では、降水量は 5 月が 110mm で最も少なく、9 月が 268mm で最も多い。また、平均気温では、8 月が 26.6℃で最も高く、1 月が 3.8℃と最も低くなっている。

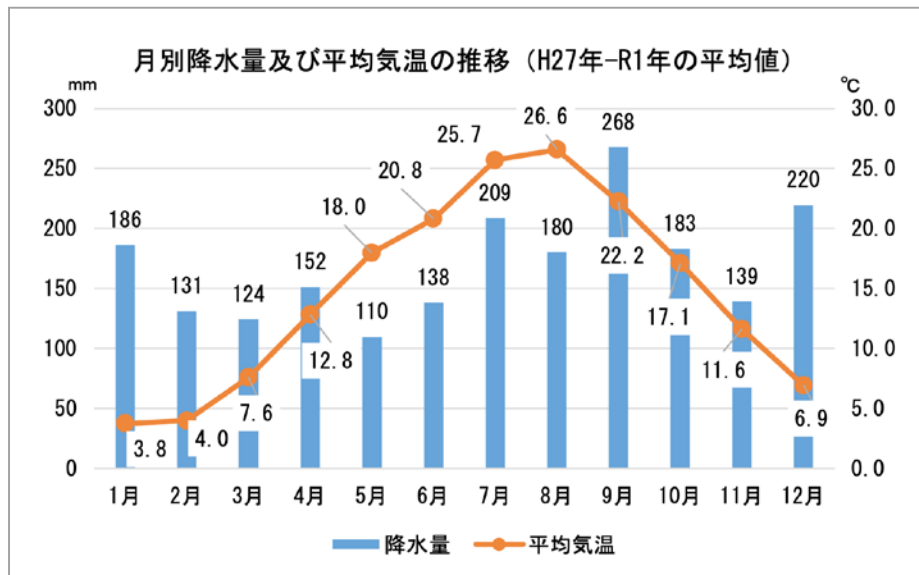


図7 坂井市の月別降水量および平均気温の推移 (H27年 - R1 年の平均値)  
【資料：気象庁ホームページ (観測地点：三国観測所)】

### (4) 生態系

本市では、『福井県の絶滅のおそれのある野生動植物 2016』(福井県刊行)の中で 331 種の野生生物種が、絶滅危惧種(県域絶滅種を除く)に選定されている。

平成 11 (1999) 年に福井県が刊行した『福井県のすぐれた自然』において「鳥獣の重要な生息地」が 15 か所挙げられており、そのうち 5 か所が本市にある。その 5 か所は「福井新港とその周辺」、「加戸の大堤」、「坂井平野」、「坂井市の丘陵地」、「九頭竜川中流域」である。

上記の 5 か所のひとつである九頭竜川中流域には、アラレガコ(標準和名：カマキリ)と呼ばれる体長約 15 ~ 20cm のカジカ科の魚類が生息しており、生息地が国の天然記念物に指定されている。また国の天然記念物に指定されている渡り鳥のカモ科のヒシクイとマガンが冬に飛来してくる。そのほか、特別天然記念物のカモシカやコウノトリが市内で確認されている。

市内には、山林や砂丘地、海岸沿いなどで半自然林、寺社林、雑木林などの人工林の植生が見られる。三里浜砂丘などの砂丘地や海岸沿いでは、防砂林として松が植えられている。また、全国や県レベルで特に重要な「すぐれた植生」が 6 か所で見られ、それらは「大堤の水生植物」、「東尋坊付近の海岸植生」、「瀧谷寺の寺叢林<sup>たきだんじ</sup>」、「雄島の照葉樹林」、「久米田神社のシラカシ林」、「東荒井の春日神社のタブノキ林」である。



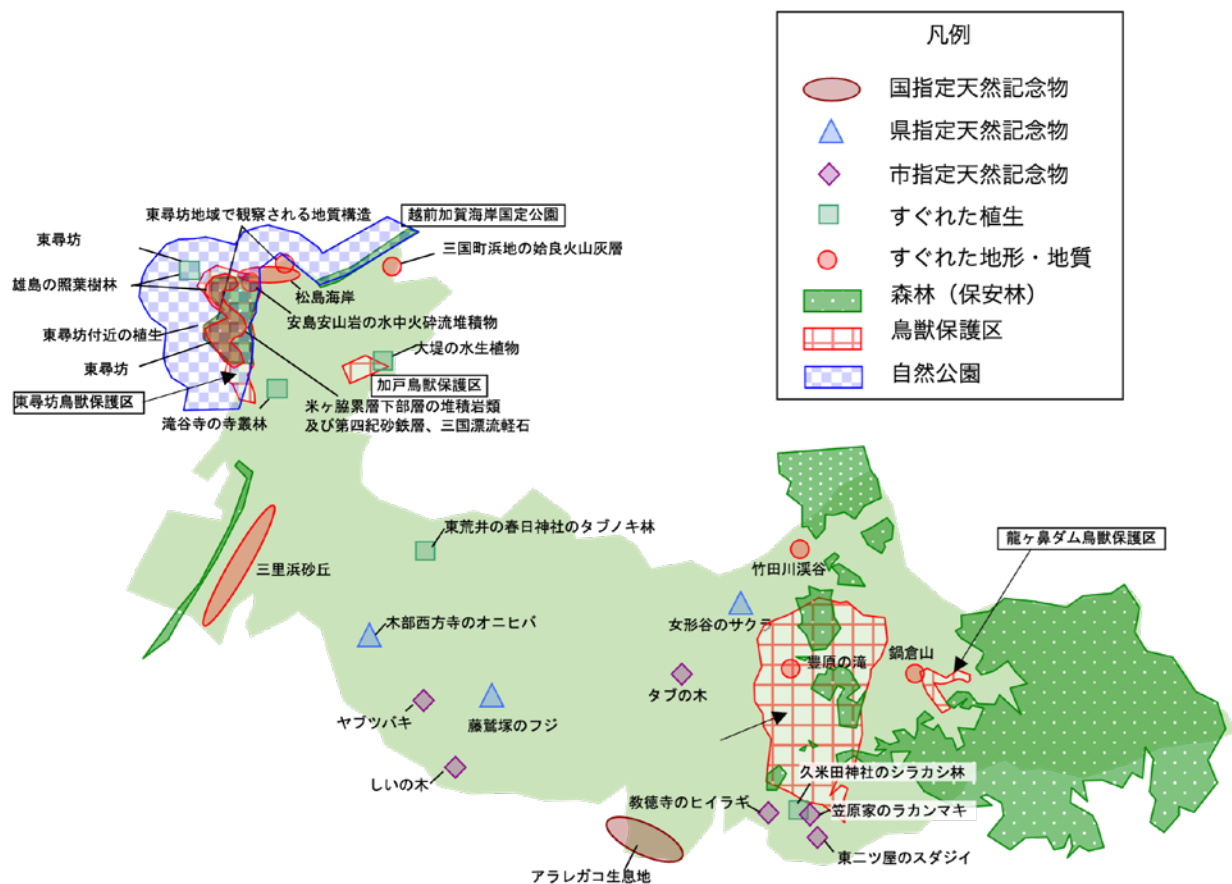


図8 坂井市の環境資源と保全地域など【出典：坂井市環境基本計画】

表1 福井県の絶滅のおそれのある野生動植物 2016

【資料：『福井県の絶滅のおそれのある野生動植物 2016』（福井県刊行）】

カテゴリー	哺乳類	鳥類	爬虫類	両生類	淡水魚類	昆虫類	陸産貝類	淡水産類	維管束植物	合計
県域絶滅	-	-	-	-	-	-	-	2	3	5
県域絶滅危惧Ⅰ類	-	15	-	-	3	8	2	-	31	59
県域絶滅危惧Ⅱ類	-	11	-	-	13	7	2	4	31	68
県域準絶滅危惧	2	21	2	3	1	20	-	4	26	79
要注目	1	34	1	3	2	35	7	3	39	125
絶滅のおそれのある地域個体群	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0
合計	3	81	3	6	19	70	11	13	130	336

## (5) 災害

本市では、江戸時代以前にも地震や水害、大規模な火災が発生したことが記録として残っている。

近代以降では、昭和 23（1948）年 6 月 28 日に丸岡町付近を震源とするマグニチュード 7.1 の直下型地震である福井地震が発生し、本市では震度 6 が観測された。この地震は、福井・坂井平野に甚大な被害をもたらし、災害救助法が適用された最初の災害である。また、この地震を契機に、気象庁の震度階級に「震度 7」が創設されたり、昭和 25（1950）年制定の建築基準法における木造住宅の耐震基準設定に活かされたりするなど、様々な分野に影響を与えた。

福井県は、冬季に降雪量の多い地域であり、まとまった降雪による被害も度々発生している。こうした豪雪による災害は、発生した年号をとって「三八豪雪」「五六豪雪」などとも呼ばれる。本市が受けた影響も大きく、特に三八豪雪では丸岡町豊原村が廃村となった。近年でも平成 30（2018）年と令和 3（2021）年に発生した豪雪では大規模な交通障害が発生した。

また、平成 9（1997）年 1 月には、日本海の島根県沖でロシア船籍のタンカーナホトカ号が沈没し、分離した船首と流れ出た重油が三国町安島海岸一带に漂着したことで広範囲に重油汚染被害が発生した。漂着油の回収作業は旧三国町が対応し、自治体、地元住民、漁業協同組合などの他、全国から多くのボランティアが駆け付け、作業が行われた。



写真 7 福井地震による被害の様子（丸岡城天守倒壊）  
【資料：重要文化財丸岡城天守修理工事報告書】



写真 8 福井地震震源地の碑（丸岡町末政）  
※震源地には諸説あり

## 2. 社会環境

### (1) 坂井市の名前の由来

「坂井」の地名は、『日本書紀』の第26代天皇の継体天皇に関する記述に「三国坂中井（さかない）」とあり、この「坂中井」が由来といわれる。この「三国」とは現三国町域より広い地域を指すと考えられる。「三国」の範囲については諸説あるが、九頭竜川・足羽川流域を中心とした旧坂井郡、福井市、永平寺町、勝山市、大野市を含む地域と推定されている。記述を要約すると、「継体天皇は、父の名が彦主人王、母の名が振媛といい、彦主人王は振媛が住む越前国の三国坂中井に使者を遣わして呼び寄せて、妃とした後、継体天皇が生まれた。しかし、継体天皇の幼少期に彦主人王は亡くなり、振媛は継体天皇の養育のため、故郷である越前高向に帰った」という内容で、本市と継体天皇のゆかりが伝えられている。

### (2) 行政単位の変遷

町村合併については、明治21（1888）年の市制・町村制の公布後、旧来の町村を新市町村の大字としたことから、明治22（1889）年4月に下表の町村となった。

昭和17（1942）年に春江村は春江町となった。昭和29（1954）年には、雄島村・加戸村・新保村が三国町と合併した。昭和30（1955）年には、磯部村の一部と大石村が春江町と合併し、鳴鹿村・磯部村の一部・高椋村・長畝村・竹田村が丸岡町と合併した。また、東十郷村・大関村・兵庫村が合併して坂井村が誕生した。

木部村は昭和31（1956）年に坂井村と合併するが、翌年、木部村の北部に位置する15区は三国町に編入し、浜四郷村と共に三国町となった。さらに昭和36（1961）年、坂井村が町制実施となり、坂井町となった。平成18（2006）年に三国町、丸岡町、春江町、坂井町の4町が合併して坂井市が誕生した。なお、合併後もこの4町名を残し、現在も住所に町名を使用している。

表2 明治22年以降の合併等の経緯

1889 (M22.4月)	1942 (S17)	1954 (S29)	1955 (S30)	1956 (S31)	1957 (S32)	1960 (S35)	1961 (S36)	2006 (H18)
三国町		三国町	三国町 (境界変更に伴う一部編入)		三国町			坂井市
雄島村								
加戸村								
新保村								
浜四郷村								
本荘村								
木部村								
東十郷村								
大関村		坂井村		坂井村		坂井町		
兵庫村								
丸岡町								
鳴鹿村								
磯部村			丸岡町		丸岡町		丸岡町	
高椋村								
長畝村								
竹田村								
坪江南部集落		(編入)					鳴鹿山鹿分割 ↓ 永平寺町へ	
磯部村								
春江村	春江町							
大石村			春江町					



図9 坂井市内の町域図とまちづくり協議会地区割図

### (3) 人口動態

平成27(2015)年10月1日現在の人口は90,280人で、福井県全体786,740人の11.5%を占め、福井県第2位の人口規模となっている。合併直前にあたる平成17(2005)年の人口が最も多く92,318人である。それ以降は減少傾向であったが、令和3(2021)年4月末の人口は微増となり、90,491人である。

平成27(2015)年10月1日現在の世帯数は29,454世帯、福井県全体279,687世帯の約10.5%を占めている。経年的には増加傾向にあるが、その伸びは鈍化している。

また、世帯人員は3.07人/世帯で、福井県の平均2.75人/世帯を上回っているが、一貫した減少傾向にあり、少子化や世帯分離が進行している状況が窺われる。

平成27(2015)年における年少人口(15歳未満)は12,748人(14.2%)で、福井県平均の13.3%を上回っているが、減少傾向にある。老年人口(65歳以上)は23,590人(26.3%)で、福井県平均の28.6%を下回っているが、一貫した増加傾向にあり、平成12(2000)年以降は年少人口が老年人口より少なくなっている。

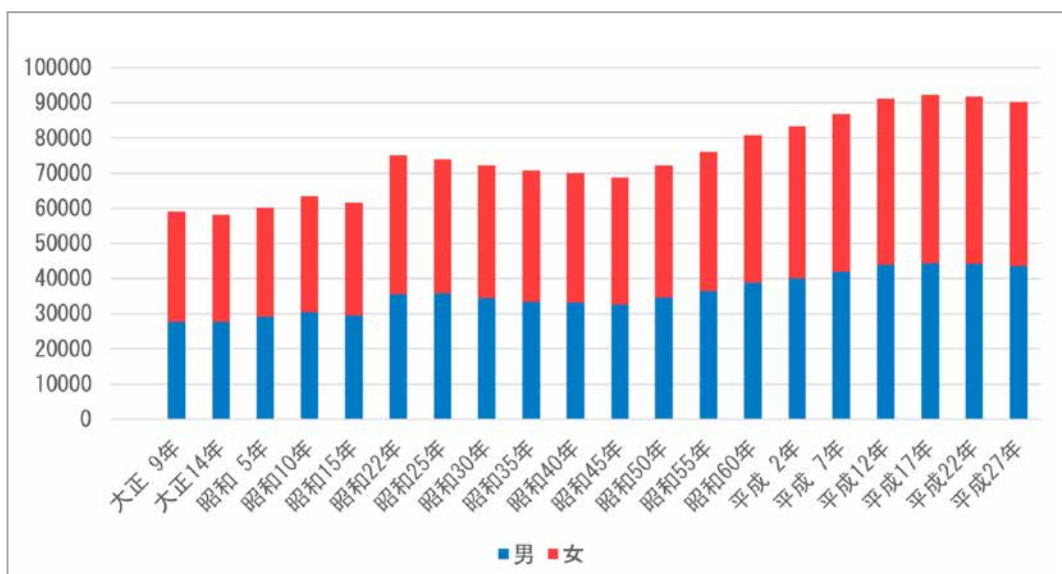


図10 坂井市の人口推移【資料：総務省統計局「国勢調査」】



今後の本市の人口は、国立社会保障・人口問題研究所が平成30（2018）年に公表した将来推計人口によると、令和42（2060）年には59,811人にまで減少することが予測されている。人口減少に伴い、平成18（2006）年では限界集落が1区、準限界集落が37区であったが、令和元（2019）年では限界集落が21区、準限界集落が114区となっている。準限界集落は市全体に散在しており、全体的に高齢化が進んでいる状況である。

限界集落は三国町に13区、丸岡町に8区あり、建物が密集する古くからの市街地に多く分布している。限界集落の中には、集落人口が減少して人口規模が非常に小さくなっている行政区もある。

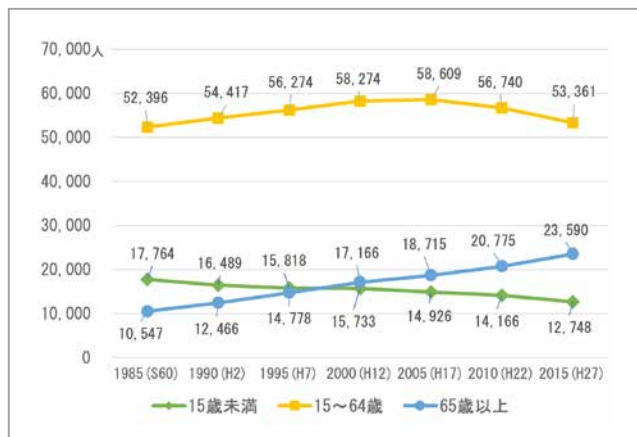


図11 坂井市の年齢階層別人口の推移  
【資料：総務省統計局「国勢調査」】

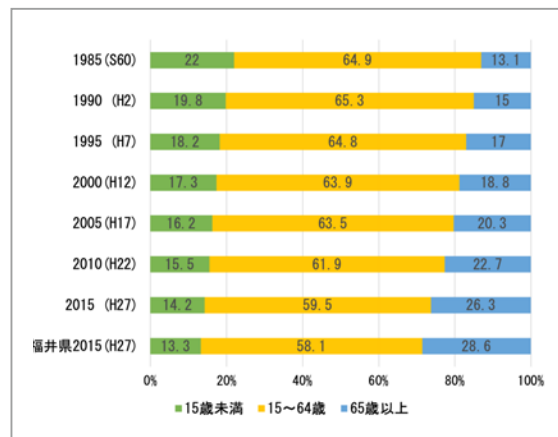


図12 坂井市の年齢階層別人口構成比の推移  
【資料：総務省統計局「国勢調査」】

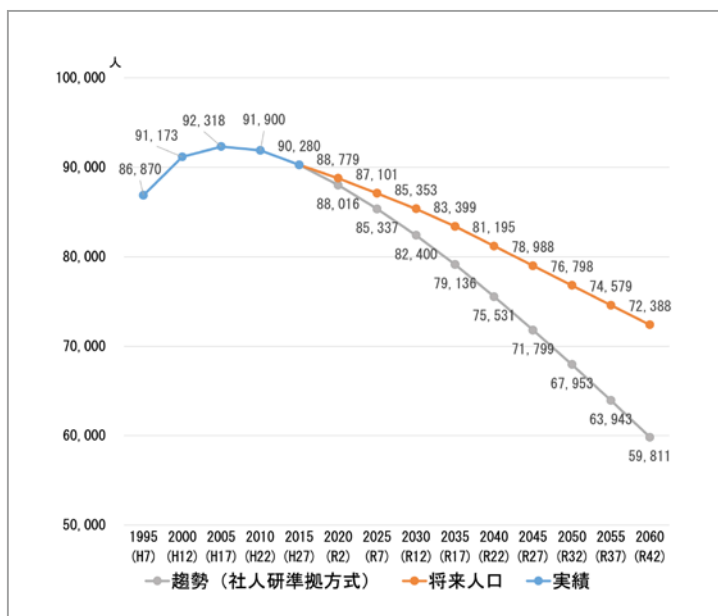


図13 坂井市の総人口の実績の推移および将来人口  
【資料：国立社会保障・人口問題研究所「日本の地域別将来推計人口（平成30年推計）」】

## (4) 産業

平成 27 (2015) 年度の国勢調査によれば、本市の就業人口は 47,726 人で、総人口の 52.9% となっている。産業別就業人口は第 1 次産業が 2,050 人 (4%)、第 2 次産業が 16,003 人 (34%)、第 3 次産業が 29,388 人 (62%) で第 3 次産業の割合が多いことが分かる。第 1 次及び第 2 次産業の就業人口は平成 17 (2005) 年から平成 22 (2010) 年にかけて減少し、第 3 次産業は微増傾向となっている。第 1 次産業では、農業、水産漁業、林業と幅広く展開されている。

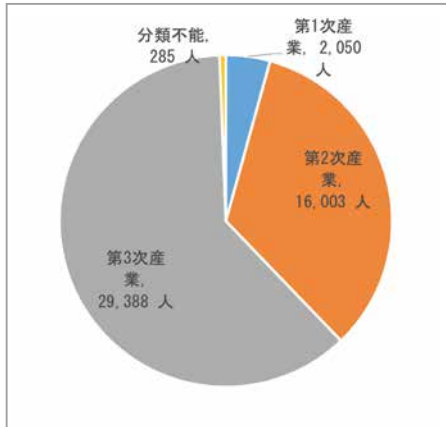


図 14 坂井市の平成 27 年度産業別 15 歳以上就業者数  
【資料：総務省統計局「国勢調査」】

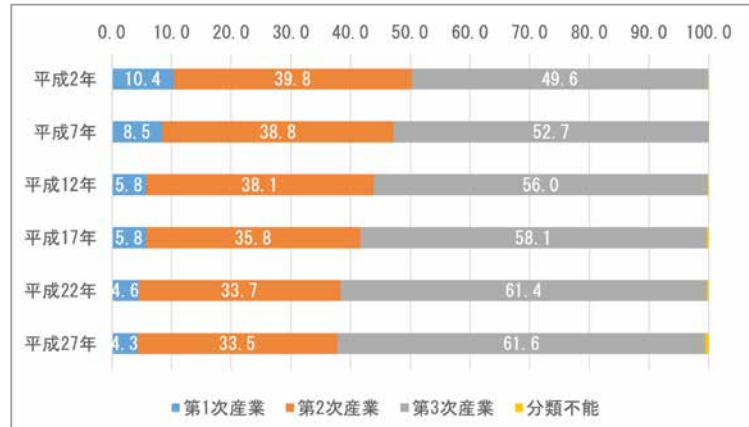


図 15 坂井市の産業別就業人口比の推移  
【資料：総務省統計局「国勢調査」】

### ①農林水産業

平成 27 (2015) 年における農業就業人口は 5,780 人である。農家数は 2,581 戸である。経年的には、農家人口、農家数ともに減少傾向にある。丸岡町では、平成 22 (2010) 年に休校になった旧竹田小学校をリノベーションして、「竹田農山村交流センターちくちくぼんぼん」を整備している。

本市は九頭竜川下流域に広がる坂井平野が福井県屈指の農業地帯となっており、水田地域では稲作を中心として大麦・大豆・そばを組み合わせた農業が盛んである。坂井北部丘陵地ではメロン、スイカ、ナシなどの果物、三里浜砂丘地では果物やらっきょうを中心とした農業が展開されている。これらの農産物の直売所としては、平成 10 (1998) 年に道の駅みくくの「ふれあいパーク三里浜」や平成 12 (2000) 年に「道の駅さかい坂井地域交流センターいねす」、また平成 29 (2017) 年には、ゆりの里公園内に「ゆりいち」が整備され、地元の季節を感じる新鮮な野菜や総菜、特産品が販売されている。

漁業は、本市沖の海底の形状が沿岸から沖合にかけて起伏に富み、玄達瀬や松出し瀬などの大きな天然礁を有していることから好漁場となっている。しかし近年では、気候変動などによる水揚げの減少から経営体数が減少している。平成 20 (2008) 年と平成 30 (2018) 年に実施された漁業センサスの調査結果を比べると、平成 20 (2008) 年では福井県内 1 位であったが、この 10 年で 8 位に下がっている。

林業は、市の面積の約 3 割を山林が占めており、豊富な森林資源を有している。そのうちの約 5 割が木材生産のために植林された人工林である。林業従事者数は、植林から間伐への作業内容の変化や高齢化により減少傾向にある。

## ②商業

平成26（2014）年の商業従業者数は5,031人、事業所数は736か所、年間販売額は約1,161億円である。経年的にみると、事業所数は減少し、従業者数は増減を繰り返している。

郊外型の大型店舗やコンビニエンスストアをはじめ、幹線道路沿いへのフランチャイズ系の飲食店や食品、医薬品など取り扱う小売店舗の出店が増加しているとともに、福井市北部地区に本市をマーケットエリアと見込む大規模な商業施設の集積などが進んでいる。地域の商店を取り巻く環境が非常に厳しい中、店舗経営者の高齢化や後継者不足に伴い、店舗が減少し、空き店舗も増加している。

## ③工業

令和2（2020）年の事業者数（従業員4人以上の事業所）は310事業所、製造品出荷額は約3,038億円である。近年では、事業者数は減少しているのに対し、従業者数は増減を繰り返している。また、市内にある工場のうち最も多い事業所は、繊維産業関係で103事業所ある。丸岡町で生産される細幅織物とゆかた帯は日本一の生産量を誇っている。織りの技術を活用し、図柄処理をコンピューターで行い、織物として描画する「越前織」も土産物やカレンダーなどとして生産されている。



写真9 越前織

グローバルな経済競争の進展や、東京を中心とする大都市一極集中、経営者や従業員の高齢化、後継者問題など、特に中小企業・小規模企業者は厳しい状況にある。しかし、近年、テクノポート福井や市内への企業の進出は増えており、長年、地域産業を支えてきた繊維や金属産業とともに市内には高度な技術を有する中小企業者が多くあることで、県内でも上位の製造品出荷額となっている。

## (5) 土地利用

総面積20,967haのうち、土地利用の割合は、田畑などの農業的土地利用が34.3%、山林などの自然的土地利用が約30%を占めており、ゆたかな自然環境に包まれている。宅地は11.7%で宅地化の進行により、農地が減少傾向にある。

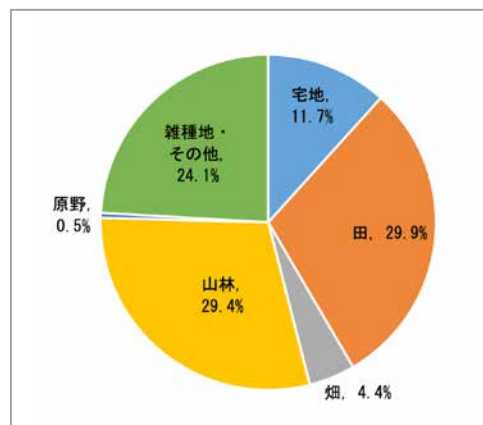


図16 坂井市の令和2年地目別面積比  
【資料：坂井市固定資産税概要調書】



## (6) 交通

市内の鉄道には、えちぜん鉄道と JR 北陸本線がある（P23 図18）。えちぜん鉄道は、福井市と三国港をつなぎ、JR 北陸本線は市域を縦断している。JR 北陸本線の駅は、丸岡駅と春江駅の 2 駅があり、金沢などの北陸方面と米原などの関西方面とつながっている。また、令和 5（2023）年度末には北陸新幹線の県内延伸に伴い、隣接市のあわら市に北陸新幹線芦原温泉駅が開業予定である。芦原温泉駅から市内各地へは、自動車を利用すれば約 20 分で移動できるため、観光客の来訪が期待されている。

明治時代以降、主な移動の交通手段は、鉄道からバスや車に変わった。国道 8 号、三国・金津・丸岡・鳴鹿の各地域をつなぐ丸岡道や、丸岡町田町から坂井町新庄・大関を通過してあわら市に至る十郷道などが整備された。

戦後、自動車交通の発達により、鉄道利用者が激減し、京福電気鉄道丸岡線と永平寺線が廃線となった。1970 年代には国道 8 号バイパスおよび北陸自動車道が開通した。市内には丸岡インターチェンジが設置されている。

現在、市内の移動手段としては自動車が重要で、東部には北陸自動車道や国道 364 号、西部には国道 305 号、中央部に国道 8 号、嶺北縦貫道、芦原街道が通っている。国道 305 号は越前海岸一帯と石川県加賀市方面とを結び、山間部を走る国道 364 号は永平寺町や石川県加賀市山中町方面とを結ぶ重要な幹線道路となっている。

鉄道以外の公共交通機関としては、京福バス、乗合タクシーの他、市が運営するコミュニティバス「ぐるっと坂井」がある。市内を運行する京福バスには路線が 25 系統あり、その中の東尋坊線や芦原丸岡永平寺線などは観光客にも利用されている。コミュニティバス「ぐるっと坂井」は、市街地と各集落とを結んでいる。

令和 2（2020）年には、丸岡町の交通結節点および丸岡城への玄関口として、バスターミナル機能とにぎわい交流機能を併設した施設「丸岡バスターミナル交流センター」を整備した。

## (7) 観光

本市は、天然記念物・名勝の「東尋坊」や現存 12 天守と数えられる「丸岡城」をはじめ、北前船寄港地として日本遺産に認定された「三国湊」など数多くの恵まれた文化財を観光資源とした県内トップの観光客入込数を誇っている。

一方で、より経済波及効果の高い滞在型観光地としての転換は十分とは言い難いため、令和 2（2020）年に坂井市観光連盟、坂井市三国観光協会、坂井市丸岡観光協会の業務の一部を統合し、一般社団法人 DMO さかい観光局が設立されている。現在、それらを中心に、観光地としての魅力の発信や、自然、歴史、文化財などのゆたかな資源を活かした体験型観光、歴史的な町並み散策、まちなか観光を充実させるなど観光資源の魅力向上に努めている。

東尋坊では、平成 23（2011）年に商店街の空き家を活用した「東尋坊観光交流センター」の整備をしている。民間の施設としては、昭和 34（1959）年に県立九頭竜公園内に松島水族館、令和 2（2020）年に空き家を活用した全国のお城ファンが集うカフェ「城小屋マルコ」が丸岡城のふもとに整備されている。

また、さらなる誘客のために本市単体だけでなく、隣接市町と連携してテーマやストーリー性を持たせ、それらの魅力を発信する広域観光が推進されている。

令和 2（2020）年頃から流行している新型コロナウイルス感染症の観光への影響は大きく、主要な観光地でもある東尋坊や丸岡城の来場者数も流行前の約 70%まで落ち込んでいる。今後の北陸新幹線県内延伸により、首都圏に加え、関西圏からの来訪者の増加が期待される。

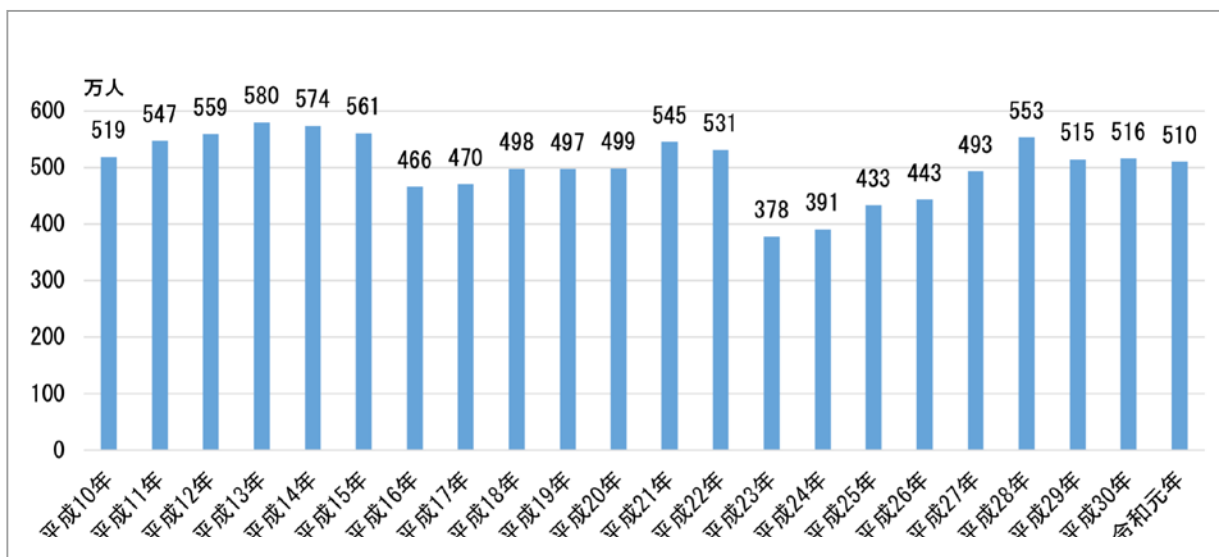


図17 坂井市の観光入込客数 【資料：坂井市統計年報】

## (8) 文化財の公開施設

### ①公開されている文化財

三国町の三国湊町地区に位置する旧森田銀行本店は取壊しの危機に直面したが、三国町で保存運動が展開された結果、平成6（1994）年に保存が決定し、旧三国町の財産となった。その後、平成9（1997）年に国の登録有形文化財となり、建物は平成11（1999）年7月に復元工事が完成している。この出来事を契機に、歴史的な建造物の取得が進み、旧岸名家住宅は公開施設として、旧梅谷家住宅は三国湊町家館として改修工事が行われた。合併後も旧大木道具店のレストラン整備や築約130年の古民家の改修によるアーバンデザインセンター坂井（UDCS）の整備、同敷地内の土蔵改修によるキッチン施設くららぼんの整備が行われ、三国湊町の歴史的町並みの保存事業が進められている。

さらに国重要文化財建造物である丸岡城天守や、三国町の出世山古墳などを復元した出世山古墳公園の整備を行っており、春江町には、織物産業が栄えた時代の技術を使った近代和風建築である旧島崎家住宅離れがある。

民間所有の文化財としては、瀧谷寺、千古の家（坪川家住宅）などがあり、観光客を受け入れている。

### ②公立の展示公開施設

#### a) みくに龍翔館

昭和56（1981）年11月に鉄筋コンクリート造りで旧三国町の郷土資料館として建設された。木造五階建八角形というユニークな形状の「龍翔小学校」の外観を模している。三国の高台に建てられた館は白亜の洋館的外観で、長年、三国町のランドマークとして親しまれてきた。

館において、市の歴史や文化に関する資料の収集・保存・調査・研究が進められ、今日に至るまで多くの特別展や企画展が開催されている。「自



写真10 みくに龍翔館

分たちの博物館」として愛される博物館を目指し、令和 5（2023）年春にリニューアルオープンの子定である。リニューアル後は、市の博物館として学校・地域・観光と連携して、さらなる博物館機能の充実を図る。

#### b) 丸岡歴史民俗資料館

丸岡城築城 400 年を記念して、昭和 53(1978) 年に丸岡城のふもとに設置した。常設展示室には、本多氏・有馬氏歴代城主ゆかりの武具や調度品、掛軸、古文書や丸岡藩の資料を収蔵展示している。また、丸岡の歴史や文化について解説している。

#### c) ONO メモリアル

青森県弘前市に生まれながらその生涯のほとんどを三国で過ごした現代美術作家 小野忠弘の旧宅とギャラリー。小野画伯は、ジャンクアート（廃品芸術）を中心に精力的な創作活動を行い、国際的に高い評価を受けた。また、三国高校の美術教師として熱心な育成活動に努め、多くの芸術家を輩出した。

平成 13（2001）年に小野画伯が亡くなった後、遺族から作品 100 点と住居・土地を一括寄贈されたことを受け、住宅兼アトリエを改修するとともに、小野画伯が生前愛した高台からの景色を取り入れた「ブルーケーキ」とよばれるギャラリーを新設し、平成 17（2005）年に「ONO メモリアル」としてオープンした。小野画伯の画業の顕彰、新しい芸術の創造と人材の育成に取り組んでいる。



写真 11 ONO メモリアル

#### d) 一筆啓上日本一短い手紙の館

徳川家康の功臣であった本多作左衛門重次が陣中から妻へ宛てた手紙「一筆啓上 火の用心 お仙泣かすな 馬肥やせ」は、用件を簡潔明瞭に伝えた手紙のお手本と言われる。手紙文の中に出てくるお仙とは、後の越前丸岡藩主・本多成重のことで、幼名を仙千代といった。

一筆啓上日本一短い手紙の館は、この本多作左衛門重次の手紙をモチーフにした「一筆啓上賞」から始まった。人間関係が希薄と言われている現代、日本の手紙文化の復権を目指そうと、平成 5（1993）年に、「母」をテーマとして一筆啓上賞の公募を始めた。一筆啓上賞の過去の作品を常設展示するために、「ふみ」の語呂合わせから平成 27（2015）年 8 月 23 日に開館した。常設展では、過去の入賞作が次々と浮かび上がる映像展示で、手紙文化の発信をしている。

### ③民間の展示公開施設

丸岡町には、昭和 59（1984）年に開業した、郷土に伝わる風俗や能・狂言・歌舞伎などを題材に竹人形や竹工芸品を製作し、展示・販売する「越前竹人形の里」がある。三国町周辺では、平成 28（2016）年に三国湊の海運の歴史と文学をテーマとする資料館として「マチノクラ」が整備された。また、平成 29（2017）年には、高浜虚子の小説「虹」の舞台となり、森田愛子の他界後、伊藤柏翠が開いた料亭「虹屋」跡地に、俳句や「虹」関係の資料などを展示するギャラリーである「虹屋スクエア」が設けられた。



また、本市には個人で貴重な資料を保管・展示している施設もある。三国町の浜四郷地区にある「今昔といろり」には、農具などが展示され、丸岡町豊原地区の「豊原三千坊史料館」では、豊原寺の仏像などが納められている。また、春江町正蓮花地区の「(公財) 正蓮花吉澤資料館」では歴史資料が展示されている。

その他、地元の行政区が「長畝日向神楽伝承館」や「表児の米会館」を開設し、無形文化財である「日向神楽」や「表児の米」を後世へ伝え続けるための活動を行っている。

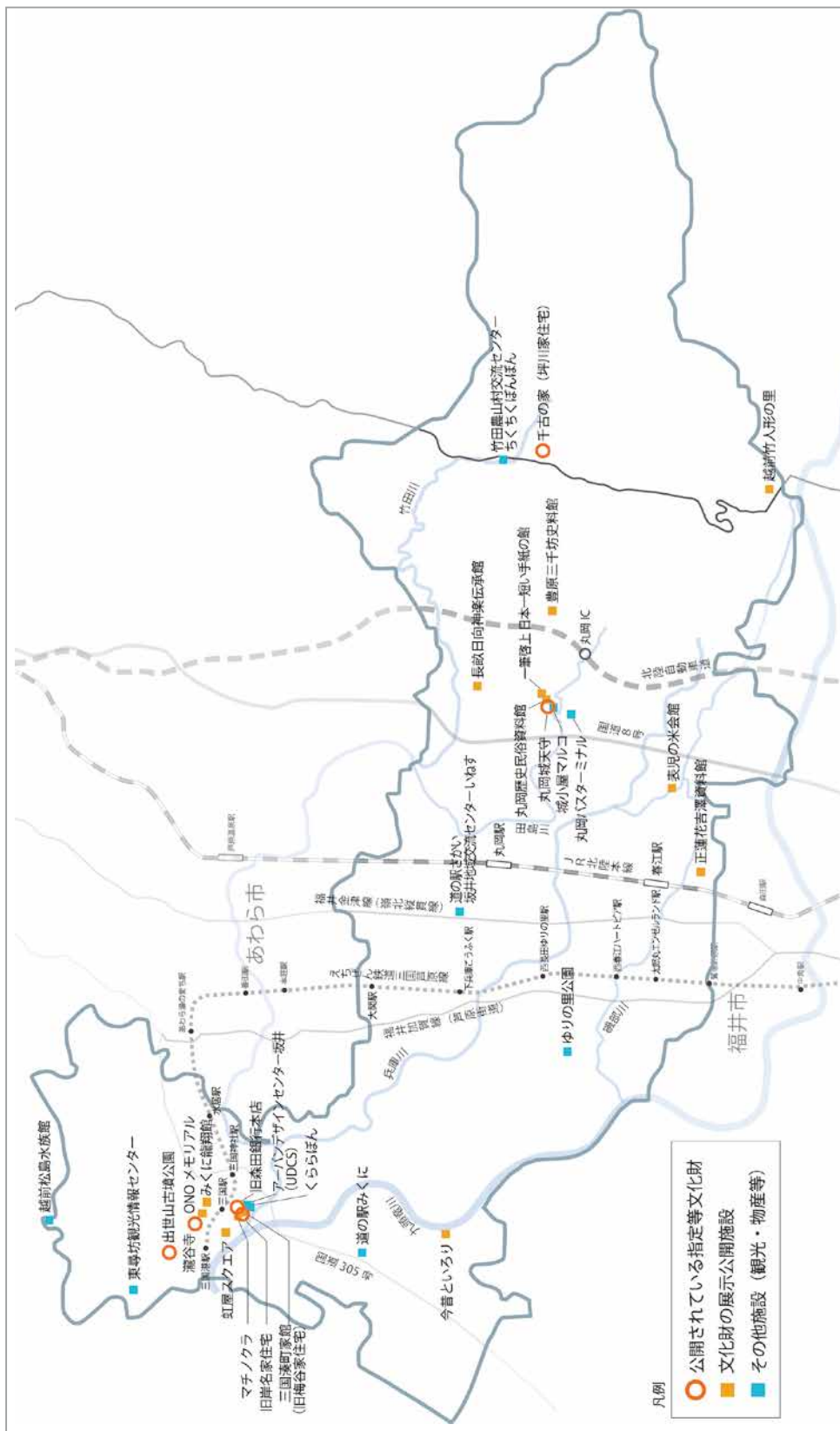


図 18 坂井市の主要な交通と文化財関連施設位置図

### 3. 歴史的環境

#### (1) 旧石器時代

この時代の人々は、土器を使用せず、石を打ち割って作る石器、動物の骨や角を利用した骨角器を用いて、氷河期の寒冷な気候の中、動物類を追い求めながら遊動生活を送っていた。福井県内では、三国町内で個人が石器3点を発見し、昭和56（1981）年に後期旧石器時代のものと認定された。これにより、県内でも約4万年前から1万数千年前の後期旧石器時代に人々が生活していたことが確認された。石器が発見された場所は現在、<sup>おしま</sup>雄島遺跡（三国町安島）・<sup>にししもむかい</sup>馬コロバシ遺跡（三国町陣ヶ岡）・西下向遺跡（三国町米ヶ脇）と名付けられている。この遺跡のうち、西下向遺跡は昭和57（1982）・58（1983）年に発掘調査が実施された。調査により発見されたナイフ形石器は、それまで主流と考えられていた剥片製作技法の「<sup>はくへん</sup>瀬戸内技法」とは異なる技法でつくられたものであり、新たに「<sup>みくに</sup>三国技法」と命名された。この石器が発見された西下向遺跡は、全国でも著名な遺跡として知られている。



写真12 旧石器時代のナイフ形石器  
（西下向遺跡）

#### (2) 縄文時代

縄や撚紐を表面に転がしたり、粘土を華麗に貼り付けた土器を「縄文土器」と呼び、それらの土器の製作・使用した時代は「縄文時代」と呼ばれている。縄文時代は、1万数千年もの長期間にわたり、土器によって草創期・早期・前期・中期・後期・晩期の6期に区分される。この時代は、大きな気温変動で、「縄文海進」「縄文海退」と言われる海水面の移動があった結果、居住できる場所が時期により変動したりしていたのではないかと推測されている。



写真13 縄文中期の土器（東向野遺跡）

本市では草創期から前期の遺跡が少ないが、北陸自動車道や北陸新幹線県内延伸、圃場整備といった開発に伴う発掘調査により、東向野遺跡（丸岡町小黑）などでは中期から晩期の多くの遺構や遺物が確認されている。これまでは、縄文時代の集落は、山地に近い台地上や河岸段丘上に形成されたと考えられていたが、<sup>おきぬのめきた</sup>沖布目北遺跡（春江町沖布目）では平野部に集落跡が確認された。他にも沖積地の坂井平野内に位置する舟寄遺跡（丸岡町舟寄）では、縄文時代中期の土器や石器が出土したほか、10基以上の建物跡が発見された。縄文時代中期以降、人々の生活の場は坂井平野の微高地などに移っていったとみられる。

### (3) 弥生時代

日本列島で本格的に水稲耕作が始まった時代が「弥生時代」と言われる。弥生時代は稲作と共に、各種の技術なども各地域の交流に伴って伝播した。当時、近畿地方を中心に確認されている農耕祭祀に使用された銅鐸も、市内でも春江町井向や三国町米ケ脇など、複数の場所で発見されている。日本全体で見ると、本市は銅鐸の発見場所としては日本海側で北限にあたる。また、北陸地方各地に共通するように、管玉や勾玉などの玉類の生産が本市においても盛んであった。市内では加戸下屋敷遺跡（三国町加戸）、河和田遺跡（坂井町河和田）などの玉造遺跡が代表である。

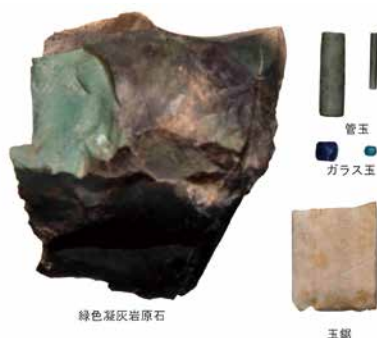


写真14 玉造関連遺物（河和田遺跡）



写真15 袈裟襷紋銅鐸  
（三国町米ケ脇）

### (4) 古墳時代

古墳時代は、前方後円墳などの古墳が造営され、中央（大和政権）と各地の政治勢力のつながりが形成されていく時代である。本市は、継体天皇の母・振媛ゆかりの地で天皇が育った「坂中井の高向」があったと推定されている。それを裏付けるかのように、市内には継体天皇の伝承が多く残り、中央とのつながりが特別強い地域であったと言える。市内には、葺石・埴輪を有し、笏谷石製の石棺を納めたと推定される前方後円墳（1号墳・3号墳）を核とする六呂瀬山古墳群（丸岡町上久米田・下久米田）があり、1号墳は北陸最大級の全長約140mを誇る。また、本市北東部からあわら市にまたがる山地には、総数約310基からなる横山古墳群がある。この古墳群の南端に位置する前方後円墳の椀貸山古墳（丸岡町坪江）は、継体天皇ゆかりの椀子王子の墓とも伝えられる。この椀貸山古墳と間近の神奈備山古墳は石屋形を備えた横穴式石室の特徴から九州地方との交流があったことを示している。これらの古墳群のほか、永平寺町の松岡古墳群なども合わせると、本市や本市周辺の山地には現在の福井県嶺北地



写真16 椀貸山古墳（丸岡町坪江）



写真17 六呂瀬山3号墳  
（丸岡町上久米田・下久米田）



方にある前方後円墳の約4分の1が集中している。一方、西部丘陵には三国町にも出世山古墳群（三国町宿）をはじめ、水運を意識した5～6世紀の古墳が丘陵上に展開している。

## (5) 奈良・平安時代

奈良時代には、天皇中心の律令制度に基づく中央集権の国家体制が整備されていき、地方は国・郡・里（のちに郷）を単位として区分された。もともと北陸地方は、越と呼ばれていたが、持統天皇の時代までには、越は越前・越中・越後に分国して越前国が誕生したと考えられている。その中であって、市域は坂井郡に属し、『和名類聚抄』高山寺本では、坂井郡は粟田・荒泊・高向・磯部・長・高屋・坪江・福留・海部・川口の10郷があったと書かれている。これらの郷の推定地は、木や文書によってほぼ特定されている。律令制が整備されたことにより、交通路も整えられ、市域のほぼ中央に官道の北陸道が通り、各所に駅も設置されていったとみられる。

天平15（743）年に墾田永年私財法が公布されて以降、市には寺社が所有する荘園が形成された。しかし、荘園専属の田地耕作者となる農民がおらず、安定した労働力の確保が難しく、荘園経営は大きく崩れ、10世紀頃までには一時衰退していったとされる。

市域において本格的に荘園が成立・確立するのは、平安末期に、現在の坂井市からあわら市にかけて成立した越前国河口荘が、白河法皇により奈良の興福寺に寄進されてからである。興福寺領の荘園が市域に進出し始めると、興福寺は同じく藤原氏の氏神とした春日大社との関係が強まり、神仏習合思想とした本地垂迹説も流行していたことから、春日信仰も市域に広がっていった。このほか、市域には、岐阜県・石川県・福井県の3県にまたがる霊峰白山を神の山とする白山信仰も既にあった。

この頃には、坂井郡は九頭竜川を挟んで、坂北郡、坂南郡の二郡に分かれていった。

## (6) 鎌倉時代

源頼朝によって幕府が開かれた鎌倉時代には、地方支配のために守護・地頭が任命され、地方に置かれた。坂北郡内の河口荘の地頭には、竹田川中流域を主に本拠としていた足田系齋藤氏の武士が命じられたとされる。河口荘は、新庄郷・関郷・大口郷・王見郷・兵庫郷・荒居郷・新郷・本庄郷・溝江郷・細呂宜郷の10郷に分かれ、隣接の坪江荘とともに、領主の興福寺にとって重要な経済基盤であった。

広大な荘園を維持するには、水の供給が必要である。奈良時代以降に開削された用水を整備・統合し、大規模な農業用水が形成された。なかでも、九頭竜川を水源に鳴鹿地域で取水し、坂井平野一帯を灌漑する用水は、河口荘十郷にちなみ、十郷用水と呼ばれた。

一方、坂井平野に広がる荘園の年貢物の積出港の三国湊は川の舟運を利用して発展した。鎌倉時代後期には、時宗の開祖・一遍の弟子である真教が越前を訪れ、現在の丸岡町長崎に称念寺を創建した。

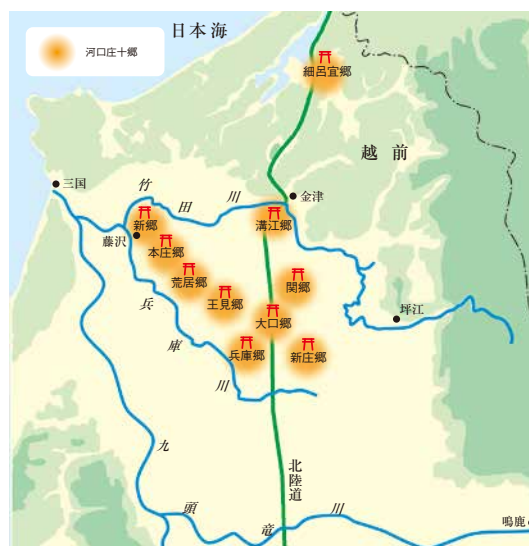


図19 河口庄十郷

宗教の面では、関東地方にルーツをもつ真宗高田門流の集団が越前に最初に入り、続いて浄土真宗本願寺門流の集団も越前に進出した。

また、榎富荘（春江町江留上・江留中・江留下）は女院領となった。女院領は課税が免除されていたことで、管理を任されていた下人（げにん）がのちに裕福になり、都で金融業の借上（かしあげ）を行うなど、下人らも次第に力を持つようになっていった。



写真 18 称念寺（丸岡町長崎）

## （7）南北朝・室町時代

元弘3（1333）年に鎌倉幕府を倒した後醍醐天皇を中心に行われた政治が短期間で崩壊し、政権が不安定になり、次の政権争いのため、朝廷が北朝方と南朝方に分かれ、抗争したのが南北朝時代である。南朝方の拠点を作ろうと、後醍醐天皇は、新田義貞を皇子とともに越前に入国させた。以降、越前国内で合戦が繰り返され、最後には北朝方が勝利した。

越前の各地で戦った義貞は、藤島の灯明寺（現在の福井市新田塚町あたり）で越前守護の斯波氏の軍に敗れ、命を落としている。義貞の亡骸は時宗の僧によって葬られ、称念寺（丸岡町長崎）の境内には新田義貞の墓所がある。

足利尊氏により、室町幕府が開かれ、室町時代が始まる。南北朝時代から室町時代を通して、越前は守護となった斯波氏が支配した。

文明3（1471）年には、浄土真宗本願寺の八世・蓮如が吉崎（あわら市）に滞在し、御文（御文章）を用いた積極的な教化を行ったことで、本願寺門流は北陸地域で飛躍的に勢力を拡大させていった。また、三国湊は、当時の海洋例規『廻船式目』の中で、主要な湊町三津七湊のひとつとして記載される、全国的な物資の輸送交易港として繁栄した。

## （8）戦国・安土桃山時代

室町幕府が衰退していき、各地で戦国大名が互いに勢力を争い、戦国時代が始まる。この時期、浄土真宗の本願寺門徒は一向一揆勢として加賀から越前に度々進攻した。坂井郡に勢力を張った堀江氏をはじめとした国人や国衆と呼ばれる中小領主も、一向一揆に抵抗している。

永正3（1506）年に加賀一向一揆が侵入して、戦国大名の朝倉氏と九頭竜川を挟んで、大規模な合戦が繰り返された。この合戦に敗れた本願寺門流の有力寺院は隣国の加賀へと亡命した。また、霊峰と呼ばれる白山ともゆかりがある豊原寺（丸岡町豊原）は、奈良時代に泰澄によって開創されたと伝わる寺院で、天正2（1574）年の越前一向一揆では一揆の拠点になった。豊原寺内には数多くの僧侶のほか、甲冑師・鍛冶師などの職人が居住し、一大都市として繁栄し、後世には豊原・小野・吉谷を併せて「豊原三千坊」とも称された。天正元（1573）年、織田信長によって朝倉氏が滅ぼされると、翌年、越前では大規模な一向一揆が起き、

その勢力は越前国一国を支配するまでに至った。しかし、天正3（1575）年には、再度侵攻してきた織田信長勢によって、一揆勢力は掃討され、豊原寺もことごとく焼き払われた。一向一揆を平定した織田信長は、柴田勝家に越前を支配させた。勝家の甥・勝豊は、豊原の地に居城を置いたが、その後、勝豊は豊原を離れ、西方の小丘に城を築いた。そして城を移すにあたり、勝豊は、豊原に居住していた職人や寺社を城下に移した。これが城下町丸岡の始まりとなる。

## (9) 江戸時代

徳川家康によって、江戸幕府が開かれ、約260年もの江戸時代が始まる。市域は結城秀康を初代藩主に迎えた福井藩が支配していた。丸岡城は福井藩の有力家臣が居住する支城であった。寛永元（1624）年に福井藩から独立して丸岡藩が成立し、本多成重が初代藩主となると、丸岡藩主の居城となった。丸岡藩は初めは本多家が治めたが、その後は、日向国延岡（宮崎県延岡市）から越後国糸魚川（新潟県糸魚川市）、さらに丸岡に入った有馬家が治めた。

三国湊は重要な湊として、福井藩が治め、金津奉行が管轄した。河村瑞賢により、日本海沿岸から津軽海峡を通過して太平洋に出て江戸に入る東廻り航路や、日本海沿岸から関門海峡・瀬戸内海を通過して大坂に入る西廻り航路が開発されると、米や物資が集まる三国湊は、やがて北前船の寄港地として大いに発展した。

江戸時代の北陸道は、越前国の南から板取、今庄、湯尾、鯖波、脇本、今宿、府中、上鯖江、水落、浅水、福井、舟橋、長崎・舟寄、金津、細呂木を経て、加賀へとつながっていた。坂井市域では、現在の春江町正蓮花、同寄安、丸岡町南横地、同北横地、同長崎、同舟寄、坂井町若宮、同長畑、同下新庄、同五本、同上関、同下関を通り、このうち長崎と舟寄に宿駅しゆくえきが設けられていた。

九頭竜川・竹田川・兵庫川・田島川など、河川が縦横に走る坂井平野では、川舟を用いた河川交通が発達していた。川舟は年貢米の輸送などに用いられた。川沿いの集落の河戸こうどと言われる船着場から積み込まれた年貢米は、下流に位置する三国湊に集められ、海運で大坂まで運ばれていった。

江戸時代においても、村々の農地を灌漑する用水は、坂井平野の人々にとっての生命線であった。鳴鹿大堰でせき止められた九頭竜川の水は、取水口や水門で分水され、118か所の村を潤していた。用水があった「高棕郷」「磯部郷」「十郷」の村々では、鳴鹿大堰の築立や



写真 19 丸岡城天守（丸岡町霞町）



写真 20 新江用水開拓者 渡辺泉龍碑（丸岡町女形谷）



補修、取水口の江<sup>きら</sup>浚えや修理などを負担していた。一方、分水された各用水路の管理は、大連家や土肥家のような、「井奉行」（井守、井番とも言う）の家が務めた。また、新江用水をはじめ十郷用水の幹線から分流する新たな用水も開削された。このほか、江戸時代に発見された竹田鉦山は銀や銅が産出したと言われ、江戸時代終わりには丸岡藩によって大鉦脈が発見された。当時は争乱の時代であったことから、軍備拡充のために盛んに採掘された。

真宗門徒が多い本市では、集落単位での講も盛んに行われていた。江戸時代には、多くの真宗門徒にとって、最も身近な信仰の拠点は本尊を安置した道場であった。現在でも各地区の寺や区民館、道場、個人宅などで集落単位ごとに講や仏事が行われている。

## （10）明治時代

越前地域北部の全ての主要な河川は最終的に九頭竜川に合流し、三国湊から日本海に注がれる。そのため、三国湊には上流から運ばれてくる土砂が堆積し、それが長年の課題となっていた。土砂の堆積で港の水深が浅くなり、港湾としての機能が低下するため、三国の豪商らが県や政府に改修を求めた結果、明治9（1876）年にオランダ人技師 G.A. エッセル（エッシャー）（※だまし絵の M.C. エッシャーの父）が派遣されることになった。エッセルが設計し、明治15（1882）年に完成した三国港（旧阪井港）突堤は、日本初の近代的な港湾修築工事の跡である。現在もその機能を果たしている貴重な国の重要文化財となっている。

明治新政府が道路の整備、鉄道の敷設を進めていくにつれ、船の往来に頼る三国湊の商業活動は減衰していった。大正時代に入ると、発動機船を導入した底曳網漁業がはじまり、三国港は商港から漁港へと転換していった。戦国時代からの由緒を持つ豪商の森田家は、廻船業の衰退により、倉庫業・銀行業へと転業した。森田銀行は、加賀銀行（石川県）、勝山野村銀行を合併・買収するなど、福井県下有数の銀行へと発展した。

明治30（1897）年9月には、北陸線沿いの福井一小松間が開通し、市内に初めて鉄道が通った。地元の熱心な鉄道敷設運動の結果、明治44（1911）年には三国支線が開業、その後も大正4（1915）年には、北陸本線の新庄駅と丸岡市街を結ぶ丸岡鉄道が開業した。このほかにも、永平寺鉄道や三国芦原電鉄が開通し、大正時代から昭和時代の初めにかけて、市内における鉄道は全盛期を迎えた。こうした鉄道の広がりや、駅周辺の商店街の発達をもたらした。明治42（1909）年10月には、江留上への送電工事が竣工し、急速に手織機から動力織りの力織機<sup>りましよつき</sup>への転換が進んだ。さらに、同業組合による品質改善や新製品の試織の結果、大正時代の中頃に春江村の機業は最盛期を迎えた。



写真 21 三国港（旧阪井港）突堤



写真 22 旧森田銀行本店（三国町南本町・元新）

第2次世界大戦では、多くの人が命を落とし、市内各所には慰霊碑、忠魂碑が建てられている。終戦前の昭和19（1944）年には、疎開のため、詩人・三好達治が雄島村米ヶ脇（三国町米ヶ脇）に身を寄せた。昭和24（1949）年までの間、三好達治は地元の文学者や三好を訪ねてくる文学者たちと交流を深めた。

昭和23（1948）年に発生した丸岡町付近を震源地とした福井地震では、昭和15（1940）～17（1942）年に解体修理を行った丸岡城天守も倒壊した。城下周辺では、建物の倒壊のほか、地震による火災が発生し、鎮火に伴う浸水も含めて地域に残っていた資料類も被災した。市内の一部では、三国町など建物の倒壊を免れた地域もあった。倒壊した丸岡城天守は、昭和26（1951）年から約4年をかけて修理工事を終え、現在のような姿となっている。

昭和41（1966）年、春江町藤鷺塚に福井空港が開港したほか、道路の整備や、九頭竜川への架橋が進められ、交通体系の近代化が推し進められていった。こうした交通網の整備は、近代産業の発展の導火線にもなった。北陸線による輸送日数・コストの削減は、県内の輸出向け絹織物業の飛躍に拍車をかけた。北陸線上の金津・丸岡・森田・大土呂・鯖江などの駅周辺3～4kmほどの村々で新たな機業地が広がっていき、春江村の輸出向け羽二重機業がその典型である。



写真23 丸岡鉄道改軌・電化の試運転列車  
(岡本英志氏 所蔵)